共に生きるために

2019年度 事業報告書

April 1, 2019 - March 31, 2020

学校法人 アジア学院

共に生きるために 2019年度 事業報告書

目次

農村指導者を育てる

06　シンプルで確かな決意を持って
　　リードするために
09　Participant Story
　　すべては子供たちのために
26　カリキュラム一覧

学習プログラム

10　アメリカの情熱ある若者たち
11　学習キャンプの進化
12　日帰りプログラムが好評

サポーターと共に

14　西日本キャラバン
15　あすなろ奨学基金、5年目を迎える
16　アジア学院の力の源 - 国際関係

アジア学院のフードライフ

18　気候変動と有機農業
19　豚伝染病対策と山羊の活用
19　Key Concept
　　災害に強いフードライフ
20　家計の向上

卒業生とのつながり

21　アジア学院ファミリーのつながりを
　　維持する
23　Graduate Story
　　ARIGA と卒業生間協力

Spotlights（スポットライト）, Research（リサーチ）, Data（データ）

04　2019 Snapshots（でき事早わかり）
11　同志社大学のアジア学院支援
　　プロジェクト
13　販売事業開始から最大の売り上げ
17　エネルギー使用調査の結果と
　　今後の方針
24　会計報告
27　コミュニティーメンバー一覧

学校法人
アジア学院

表紙イラスト　中山 紀子
© 2020 年　学校法人アジア学院

ご挨拶

星野 正興
理事長

荒川 朋子
校長

今年度も神様のお導きとお恵みによって、大変充実した農村指導者研修プログラムを実施することができました。また教育プログラムや販売事業などの付随事業においても多くの成果が得られたことを、ここに喜びをもってご報告いたします。これらの多種多様な事業を遂行するために、今年も国内外の多くの方々から惜しみないご協力やご支援をいただきました。心からの感謝を申し上げます。

今年度はここ数年来進めていたいくつかのプログラムがダイナミックに展開した素晴らしい年でありました。ひとつ目は今年度から始まった平和と和解のリーダー養成プログラムです。これはアメリカのテキサス・クリスチャン大学から頂いたグローバル・イノベーター賞と並行して企画されたもので、アジア学院を真に平和を創り出す場、和解をもたらす場に成長させるための研修を職員対象に５年計画で行っていきます。熊本大学の石原明子准教授に全体のコーディネートをしていただき、初年度の今年は８月と３月に２回の研修を行いました。職員皆で、ひとりひとりが持つ「アジア学院が作る『平和』」のイメージや思い、同時にアジア学院の中にある具体的なコンフリクト（対立、衝突、軋轢）を共有し、それらが「平和の種」、「平和への入り口」になりうることを確認しました。

ふたつ目の展開は卒業生とのつながりです。卒業生アウトリーチ部門の発足から２年目の今年は、現役学生が学んだことを卒業後にどのように具体的に形にしていくのか、新しいことを地域の人々とどう共有していくのかということを、よりはっきりとイメージすることを目的にした「卒業生セミナー」を９月に行いました。インドネシア、ミャンマーで草の根のサーバントリーダーとして活躍する２名の卒業生を招き、現役の学生と活発な議論を持ってもらいました。また卒業生アウトリーチ担当職員は、シエラレオネ（４月）、インドネシア（11 月）、ミャンマー（２月）と３か国を訪問し、卒業生たちの様々な活動に触れてきました。シエラレオネでは、ドイツ人ボランティアであるドナータ・エルシェンブローフさんとパートナーのオットー・シュヴァイツァさんが同行し、この２人によって卒業生の活動の映像が作られました。インドネシアでは、アジア学院で最も多い卒業生を抱えるバタック・プロテスタント教会（HKBP）が主催して国際大会が開かれました。インドネシア国内から 22 名、海外からも 10 名（スリランカ６名、カンボジア１名、バングラデッシュ１名、東ティモール１名、マレーシア１名）の卒業生が集まり、地元の教会、NGO からも参加者を得て、「Food, Justice and Reconciliation (食べもの、正義、和解)」をテーマに３日間のディスカッションやアジア学院卒業生の活動見学が行われました。アジア学院からは卒業生アウトリーチ担当を含め３名の職員が参加しました。ミャンマーは最も活発な卒業生組織がありますが、今年も 13 名の卒業生が集い、豊かな学び合いの機会を持ちました。（21-23 ページ参照）

その他、今年度特筆すべきことは、10 月に開催された「収穫感謝の日」が大型台風のために通常の２日間から１日に削られたことでした。これまでどんな天候であっても中止をすることはありませんでしたが、初めて中止を余儀なくされました。気候変動は学院の農業に様々な影響を与えていますが、交通の遮断や行事中の事故が危惧され行事を断念せざるを得ないほどの規模の台風が珍しくなくなってきたということは、気候変動がまた一段上のレベルに上がったことを心配させます。この現実を直視し気候変動に向けてより具体的な手を打つべく、私たちは今年度 CO_2 の削減により真剣に取り組むことを決めました。秋には学院のエネルギー使用量を調査し、CO_2 削減のための具体案を専門家に提案していただきました。その一つとして、来年度に太陽光発電を増強するためのソーラーパネルを設置する計画が立てられました。

最後に、今まさに世界中で猛威を振るっているウィルスの脅威と未曽有の影響について触れないわけにはいきません。アジア学院では新型コロナウィルスの感染が伝えられるずっと前、2018 年夏から日本で発生している豚熱という家畜の伝染症の予防に努めてきました。豚熱の場合は、豚熱ウィルスが、それを持ち込む野生動物が豚舎に侵入したり、ウィルスの付着した車両や作業靴が豚舎に入ることによって感染が広がります。豚熱は感染力が強いので、１頭でも感染すると、その豚舎の半径３キロ以内の豚がすべて殺処分されます。私たちは豚舎の周りに野生動物が侵入しないように防護柵を設置したり、消石灰を撒いたり、豚舎に入る人を管理し、作業前に作業靴の消毒をするなどの処置を行ってきました。新型コロナウィルスがヒトに感染し脅威をもたらす今、同様の予防策が人間間でも必要になる事態になっています。人間社会においては、感染を食い止めるために「感染源から半径３キロ以内の殺処分」などということは行われませんが、都市封鎖をして人が息を潜める姿は社会活動の「殺処分」とも言えます。

これまですべてのものと「共に生きる」ことを目指してきた私たちは、2011 年に「放射能と共に生きる」という難題を突き付けられました。９年後の今は、世界中で人種や地域や社会の違いを問わず、人が人と関わることを制御せざるを得ない未知の状況下で「新たなウィルスと共に生きる」という最難題を神様から突き付けられています。全く新しい生き方を模索し、実際にそれを選ぶのかどうか、神様はそう私たちに問いかけているような気がいたします。

皆様の健康を祈りつつ、この難題を皆様と共に真剣に考えていきたいと思います。

2019 Snapshots

学校法人
アジア学院

新しいシンボルマークとロゴ

セリフ書体はアジア学院が信頼の置ける学びの場であることを表しており、丸みのある形状は以前のロゴよりも人を惹きつけるものになっています。以前よりも温かく落ち着いたトーンの緑色は、人間らしく持続可能な生き方へのコミットメントを裏付けています。

ブランディング プロジェクト

**アジア学院の活動を根本から見つめ直し、
新しい統一したデザイン戦略が打ち立てられました。**

2018 年度後半、アジア学院の広報チームは前代未聞の挑戦に取り掛かりました。学院の広報やコミュニケーションのための強力なブランディング・システムを構築するというプロジェクトです。

これまでアジア学院には統一したメディアデザイン戦略がありませんでした。なくても特別大きな問題はなかったのですが、アジア学院の活動、製品が多様化し、サポーターの支援形態が複雑化するにつれ、より明確で目的がはっきりしたメディアデザインの必要性が高まってきました。メディアデザインがバラバラだと、アジア学院とは何か、何を目指しているのかということについて誤解が生じかねないのです。

広報チームは学院メンバーへのインタビューやアンケートを通してアジア学院に関する意見を幅広く収集し、アジア学院を他の機関と異なるものとして特徴づけるユニークな点を見出す調査を行いました。

結果は図１のとおりです。これらの特徴が、多くの人がアジア学院に惹かれ、アジア学院を支援したいと思う理由であると考えました。そして最終的にアジア学院の核となるアイデンティティを一言で表す以下のステートメント（文）が導き出されました。

紀要 euodoō（ユオードー） 第４号発行

アジア学院の理念、思想、大切にする価値観のよりよい理解と啓蒙のために、アジア学院職員、卒業生、関係者らの論文やエッセーを集めた紀要の第４号が発行されました。論文は、食べものと教育を結びつける学校菜園について、アジア学院メンバーの「食べもの」に対する認識について、またアジア学院の気候変動教育に関するものが３つ、小論文として「尊厳」に関するもの、研究科生２名のものが掲載されています。また創設者高見敏弘の 22 年前のドイツでの講演記録も掲載され、内容豊かな１冊となっています。

アジア学院ベクレルセンターの歩み 発行

2012 年１月にオープンしたアジア学院ベクレルセンターでの測定結果をベースに、放射能と共に生きるということはどういうことなのかを分かりやすく説明した冊子。同内容のポスターも作成されました。このプロジェクトはカナダ合同教会の支援で実現しました。

2019年ユネスコ／日本ESD賞 日本推薦団体として 国際審査会に進出

「2019 年ユネスコ／日本 ESD 賞」において、日本からユネスコへ推薦される３団体の一つとして国内審査を通過し、国際審査会へ進出しました。残念ながら国際審査では、最終審査に残ることができませんでしたが、国内審査においては以下の点が高く評価されました。

- 社会的弱者に奉仕する農村指導者を育成し、公正で平和な持続可能な社会の実現を図る活動。
- 長年にわたり、公正で持続可能な社会づくりのため、国際ネットワークで活動し多くの人材を輩出。

ESD とは：
Education for Sustainable Development
持続可能な開発のための教育。

ユネスコ／日本 ESD 賞とは：
世界中の ESD の実践者にとってより良い取組に挑戦する動機付けと、優れた取組を世界中に広めることを目的として、2015 年に日本政府の財政支援により創設されました。

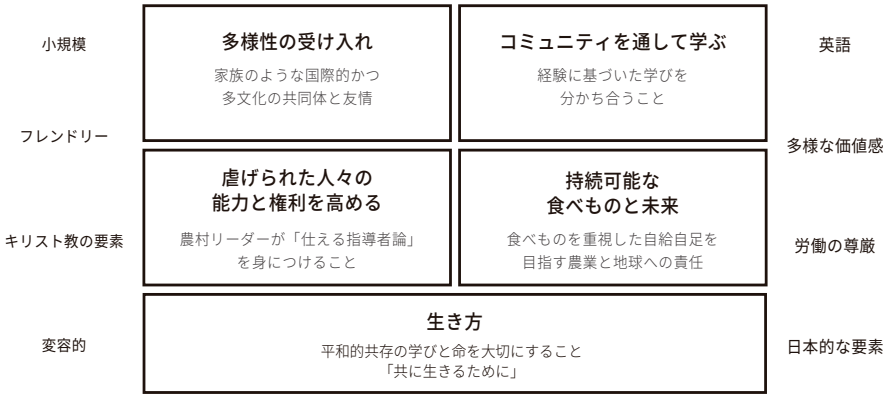


図1 アジア学院の主な特徴

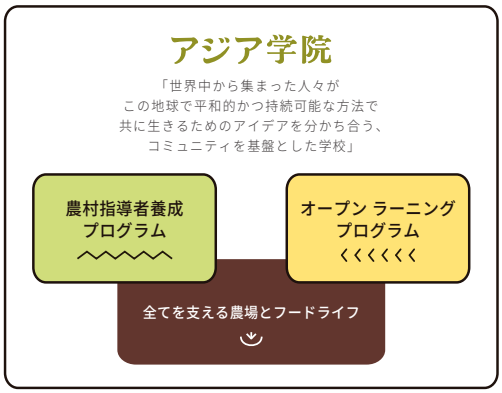


図2 アジア学院の教育活動

「アジア学院は、世界中から集まった人々がこの地球で平和的かつ持続可能な方法で共に生きるためのアイデアを分かち合う、コミュニティを基盤とした学校です。」

2019 年、この一文がアジア学院のあらゆるメディアを統一するデザインシステム構築の出発点となりました。今後、アジア学院の使命やユニークな点をより容易に理解していただくために、ウェブサイト、印刷物、製品などのデザインは、デザインシステムに基づいて新たに生まれ変わります。

新しいロゴとワードマークがその一例です。セリフ書体はアジア学院が信頼のおける学びの場であることを表しており、丸みのある形状は以前のロゴよりも人を惹きつけるものになっています。以前よりも温かく落ち着いたトーンの緑色は、人間らしく持続可能な生き方へのコミットメントを裏付けています。

アイデンティティ・ステートメントの作成によって、アジア学院の運営における他の側面を再考することもできました。例えば、パートナー、サポーター、お客様との関係についての理解に重要な変化が生じました。一般向けの活動（キャンプ、ワークショップ、イベント等）は全て「オープン ラーニング プログラム」という教育構想の下に行うことにし、「個々人が自己の潜在能力を最大限に発揮できるような、公正且つ平和で健全な環境を持つ世界を構築する」というアジア学院の使命を果たすに当たり、「オープン ラーニング プログラム」に参加する方々の存在を以前にも増して認識するようになりました。

CO_2削減 ポテンシャル診断

環境省 2019 年度
二酸化炭素排出抑制対策事業

気候変動に対する本格的な取組みの第一歩として、京都の小河 SD コンサルティングと木野環境にご協力いただき、上記補助金を利用して、アジア学院のエネルギー使用量を計測し、エネルギーバランスと CO_2 排出量を算出してもらいました（17 ページ参照）。またカリキュラムの中にも気候変動教育を導入し、研修と生活の中での位置づけを明確にしました（アジア学院の気候変動教育については、紀要 euodoō（ユオードー） 第 4 号に掲載）。

哀悼

久世 了
4 月 15 日 召天（享年 83 歳）

2004 年度～ 2010 年度 理事、2010年度～2014年度 評議員
元明治学院学院長

那須塩原市内にお住まいで、公私にわたって礼子夫人と共に学院との交わりを深めてくださいました。

ご家族のご希望により 4 月 19 日、学院のコイノニア（食堂）にて告別式が行われました。

船津 祥
7 月 20 日召天（享年 86 歳）

1997 年～ 2015 年　監事

長く栃木県の自動車業界をけん引し、引退後はとちぎ YMCA の設立など、市民のボランティア活動の活性化、栃木県の国際化にも多大な貢献をされました。

戸松 正
6 月 23 日 逝去（享年 73 歳）

帰農志塾創設者、元塾長

帰農志塾は有機農家を養成する塾で、1976 年に茨城県でスタート。1992 年に栃木県那須烏山市に移転してからは、見学研修や学生の夏期個人研修などで毎年お世話になっています。戸松氏は 2001 年「アジア農民と共に生きる会」を立ち上げ、アジア学院卒業生ウェスリー・リンガ（インドネシア）と共にトレーニングセンターの設立に尽力されました。また学院の卒業生アウトリーチ創設の際にもご協力いただきました。

農村指導者を育てる

シンプルで確かな決意を持ってリードするために

2019年度農村指導者研修プログラム報告

大柳 由紀子
副校長・教務主任

2019年度、アジア学院は13か国22名が研修を無事終了することができました。この研修を物心両面でお支え下さった全ての方に、心からの感謝を申し上げます。4月1日の研修開始から卒業まで9か月258日、座学や農作業や日常生活を通して、学生たちは自らのリーダーシップを磨くための研修に取り組みつづけ、その成長と変革はまさに目を見張るものがありました。

リーダーシップと尊厳

今年の研修の中で特記すべきは、「尊厳」(dignity)という言葉です。この尊厳についての特別授業を今年初めて取り入れたのですが、学生たちはそれまで学んできたリーダーシップや日常生活からの学びについて、あるいは様々な社会問題について考えるときに、「尊厳」を通して考えることで理解が深まったように感じます。

そもそも尊厳とは何か。アジア学院のキーコンセプトの一つに「労働の尊厳」があります。学生たちの国においては、農業や農民に対してネガティブなイメージがあります。それをアジア学院における農作業を通して、あるいは研修旅行先で出会う有機農家の皆さんから哲学を学ぶことを通して、学生たちは農業における労働の尊厳について考え、農業に誇りを取り戻していきます。しかし、リーダーシップ全般において、尊厳という言葉自体を私たちは深く考えたことがなかったように思うのです。今年初めて取り入れた授業を通して、学生たちは自らのリーダーシップにどう適用していくかを考えるようになりました。

紛争解決と平和構築の授業

「尊厳に関する授業は私の送り出し団体の職員や青年リーダーを含むコミュニティリーダーのために用いたいと考えています。進歩と社会の変化につながる変革をテーマに、同じタイプのワークショップを開催する価値があると考えています。
『尊厳』という言葉はこれまでも何度も耳にし、また使ってきましたが、この授業によってその言葉の意味がより深くなりました。基点となるのは、すべての人間は独自の自己価値で構成されているということです。授業では、尊厳の 10 の重要な要素と、尊厳を侵害する 10 の誘惑に焦点を当てています。これらの要素は私の理解を深め、他の人を自分自身と同じに受け入れることにより、人との関係性を映し出してくれたのです。」

アレックス・オウス
（福音長老教会、アメゾテ・カレッジ、ガーナ）

尊厳授業の特別講師ジェフリー・メンゼンディーク氏（右）
（2015 年 ）提供：ジェフリー・メンゼンディーク

(1) 朝のフードライフワークにて、ニワトリ小屋の清掃を行う学生たち。(2) 秋の稲刈り。
(3) サツマイモの収穫。(4) 4 月初旬のコミュニティイベント。

気候変動への挑戦

学生たちの住む途上国農村において、気候変動は大きな負のインパクトを与えています。気温が上がる、雨季の時期がずれる、日照りが起きる、洪水が起きるなどの気候変動の影響は熱帯ほど大きく、その中でも農民が最も影響を受けるからです。アジア学院では 2016 年から研修に気候変動に関する授業を取り入れています。聖心女子大学の永田佳之氏による特別講義とグループディスカッションを中心としたワークショップを実施しています。ワークショップではユネスコの「気候アクション」のための全学的アプローチの 4 領域を話し合ったり、気候変動教育自己評価シートを用いて自分自身および自分のコミュニティを振り返りました。さらに 6 月には聖心女子大学における展示・ワークショップのためのスペース「BE*hive」を訪れ、様々な学びを得ることができました（詳細は紀要euodoō（ユオードー）第 4 号に掲載）。

コミュニティに抱く夢

アジア学院では卒業論文ではなく、リフレクションペーパーというものを書きます。第一章で過去すなわち自分の仕事とコミュニティについて記し、第二章で現在すなわちアジア学院での学びを、第三章で未来すなわち自分の夢について述べていきます。その第三章を最終口頭発表で述べるのですが、彼らの夢は「有機農業の重要性をコミュニティが理解する」「持続可能な農業を通した安全な食べ物を得る」「若者が勇気づけられる社会の実現」「健康な環境を築き上げた村」など様々です。その中で、ある学生が「helping the poor,　貧しい人々を助ける」と述べました。それは一見シンプルですが、人々への愛と、燃える思いに裏付けられた、確かな決意でした。彼の夢こそが、学生全ての想いを代表しているのではないかと私は思うのです。

卒業は、彼ら自身にとって終わりではなく始まりの日でもあります。だから私た

5

ちは卒業式に“graduation”ではなく、始まりの意味を持つ“commencement”を使っているのです。学生たちは卒業し、学院からは巣立っていきました。しかしながら彼らの夢は、彼らの本当の学びはここから始まります。ある日の朝の集会で、職員の一人が“my dream = your dream”「僕の夢は、皆さんの夢がかなうこと」と言っていましたが、その思いは私たち職員全員の、偽らざる思いでもあるのです。

PARTICIPANT STORY

すべては子供たちのために

ハユ・プトゥリ・アスタリ
（アル・アマナ学院、インドネシア）

ハユは、インドネシアにあるイスラム寄宿学校、アル・アマナ学院の教師である。２５歳という、アジア学院では最も若い年齢層（海外の学生は２５歳以上）であることから、選考当時は「文化的にも年齢的にもジェンダー的にも、自分の意見をはっきりと述べることができるか心配だ。学院での研修を通してリーダーシップを身に着けてほしい」と思っていたが、本人に会ってそれらはすべて杞憂であることがはっきりと分かった。彼女は自分の意見は遠慮なく発言できた。むしろ「私は怒りっぽいし、話し方が感情的すぎると指摘される。私の問題は、私自身の心のあり方ね」と自己分析するほどであった。「自分の意見をはっきりと言うアフリカ人学生、自分の意見を押し殺して同調しようとするアジア人学生」という私たちのもつステレオタイプを見事に覆してくれたハユは、どんなことにもチャレンジし、自分が苦手なことも克服し、物おじすることも目標を見失うこともせずに、最後まで高い意識をもって研修に取り組んでいった。「最初は農作業が辛かった。経験がなかったから。最初の一か月は筋肉痛で体が動かなくなったわ」と言われてむしろ職員が驚いたほど、彼女は弱みを見せなかった。英語は苦手にしていたが、あきらめることはなかった。親子ほども年齢の違う年上の同級生に対し、実は遠慮があったというが、それも感じさせることはなかった。すべては「子供たちの未来のため、その教育を確立する」という目標が確固としていたからである。

アジア学院では、各学生は卒業論文ではなく自分を見つめなおすために「リフレクションペーパー」を書いていく。ハユはその題名を「適切な未来のための教育 (Education for a Suitable Future) とした。「本当は『持続可能な』(sustainable) と書こうとして、間違えて『適切な』(suitable) にしちゃったけど、それもいいなと思って」と笑っていたが、内容は正に『適切な未来』に向けてのものだった。アル・アマナ学院の教育課程に有機農業をとりいれていく、子供たちだけでなくその保護者も共に教育を担っていく。土を守り自然を守り、次世代をより適したものへとしていく。目の前の利益ではなく、持続可能なコミュニティを築いていく大切さを伝える。農村の価値と大切さを伝える。そのために自分だけが前に立つのではないこともすでにハユは理解している。「私が望むようにすべてを変えることは不可能だと思います。私一人で実行するのではなく、コミュニティが共に進むことが必要です。彼らが望むものを決定するのは彼らです。私の存在はファシリテーターとしてのみです。彼ら自身が、自分たちのリーダーになっていく、そのための手助けを私はするのです。」

その言葉通り、帰国してすぐにアジア学院での学びを同僚や保護者に分かち合い始めている。彼女の挑戦はまだ始まったばかりだ。

アメリカからのインターンとボランティア

学習プログラム

アメリカの情熱ある若者たち

アメリカの大学からのインターン生は、アジア学院のコミュニティでの生活を存分に堪能しました。

キャシー・フローディ
国際関係課長

アジア学院では毎年夏に、大学、キリスト教会、キリスト教団体の宣教部、神学校を通してインターン生を受け入れています。2019年はアメリカからミネソタ州のセントオラフ大学、マサチューセッツ州のウェルズリー大学、そして新たな教育パートナーであるオハイオ州のウィルミントン大学からインターン参加者が集まりました。各大学のインターン担当教師は、アジア学院が提供するユニークで豊かな時間を学生に体験してほしいと望んでいます。
インターン生は学院の各部門に配属され、農場、キッチン、オフィスまたは共同体生活において新たなスキルを獲得します。また、各自のスキルや知識についてプレゼンテーションを行います。

ウィルミントン大学のエマ・マークスさんはこう振り返ります。「毎日、農場での仕事を通して他者についての理解を深めることができました。また、このように食べものを育て消費することは、典型的なアメリカの食生活とは大きく異なっていました。アジア学院では自分が食べものの生産の一部分を担うため、自分の食べるものがどこから来ているのか認識することができます。私たちが育て、分かち合う食べものは、私たち皆を共通の目標のもとに結び合わせてくれます。図書室で農作業について調べたり、キッチンで未知の野菜の調理を試みたりと、アジア学院での時間を存分に使うことを奨励されているように感じました。」

インターン生の滞在中に学びを得るのは彼ら自身に留まりません。コミュニティ全体がインターン生の努力や視点から影響を受けます。アメリカの若者が今日、環境の持続可能性と正義、農業を通じた社会変革、そして人権についてどれほどの情熱を持っているかということを私たちは学ぶのです。

スタディキャンプで学ぶ同志社大学学生

学習キャンプの進化

アジア学院独自のキャンプ体験に参加する学生たちへ、新たな価値を届けます。

山下 崇
募金・国内事業課長
(教育プログラム・
那須セミナーハウス主事)

那須セミナーハスに宿泊した団体
(47 団体 501 名)

関東 共愛学園高校、非電化工房、日本写真芸術専門学校、宇都宮大学重田ゼミ、文京学院大学甲斐田ゼミ、宇都宮大学重田ゼミ、市川グループ、国際基督教大学高校、代田教会、瀬田教会、自由の森学園高校、新島学園高校、明治学院大学宗教部、明治大学寺田ゼミ、佼成学園女子中学、立教大学 YMCA、東洋大学、学生キリスト教友愛会（SCF）、青山女子短期大学、新島学園短期大学、桜美林大学、恵泉女学園大学、東京大学、聖心女子大学、江戸川大学、神田女学園中学、国際基督教大学宗務部、佼成学園女子高校、YMCA 同盟
関西 同志社大学国際居住研究会、丸谷一家
静岡・長野・三重 聖隷クリストファー高校、佐久総合病院、サレジオ神学院
海外 テキサス・クリスチャン大学、First UMC Kissmmee
その他 オープンキャンパス、イングリッシュファーム、ARI99 年度同窓会、シャロムシーズ、Winter Camp、Caring for the Future Foundation、ウィメンズカンファレンス

2019 年度はこれまで事業収入に大きく貢献していた青年海外協力隊の補完研修収入が断たれるということがわかっており、これをどのように埋めていくのかが課題となりました。また、団体向けのプログラムであるスタディキャンプは多くがリピーターで、これまで行っていたフードライフをテーマとした 2 泊 3 日のプログラムだけでなく、次なるレギュラープログラムの期待が高まっていました。そこで 2 つの課題に向き合うべく、アジア学院の大事なコンセプトであるサーバントリーダーシップを学ぶプログラムを作り、従来のものに一日加えた 3 泊 4 日のプログラムを企画しました。その結果 47 団体中 17 団体が 4 泊以上でのプログラムに参加し、収入の穴を埋めていくことに貢献しました。

これまでサーバントリーダーシップの講義を行う時は専ら校長に頼んでいたのですが、「自分たちもできるようになろう！」とスタッフ同士で勉強し、協力し合いながら作り上げていったことも大きな収穫となりました。団体の興味や人数に合わせ講義するスタッフを変えることができたり、互いの講義で良いポイントを取り入れたりしながらプログラムの質を上げていくことができました。

「サーバントリーダーシップは“相手本位”のリーダーで、相手に耳を傾け、相手のために行動することだと知ることができた。しかし、この実践は簡単ではなく長い時間をかけて追い求めていきたい。」
「自分の小さな努力、誰かの小さな努力に気づいて素敵だね、素晴らしいよと言ってあげられるリーダーになりたい。」
（スタディキャンプ参加者）

SPOTLIGHT

同志社大学のアジア学院支援プロジェクト

< < < < < < <

毎年多くの大学生がアジア学院に来てくれますが、最も多く来てくれるのが遠く離れた京都にある同志社大学の学生たちです。大変うれしいことに、2016 年には北浦莉絵さんがアジア学院支援プロジェクトを大学内に立ち上げてくれました。2019 年には辻美里さんがリーダーを務めてくれ、プロジェクトメンバーは 30 名を超えるまでに成長しています。

北浦 莉絵 さん

「私達がプロジェクトを立ち上げた時の想いはただ一つ、『アジア学院に恩返しがしたい』これに尽きました。

突然訪れてきた私達を温かく迎えてくれて、多様な学びを与えてくれるアジア学院。

しかしいつも与えてもらうばかりで、何も返すことが出来ていませんでした。ただの学生である私達に何が出来るのか、どうすれば与えられるだけの存在から抜け出せるのか、このような想いのもとプロジェクトメンバー全員で考え模索し、動き続けた 4 年間でした。」

辻 美里 さん

「私たちプロジェクトメンバーは、学内外のイベントでアジア学院の商品の販売やアジア学院の広報活動を行っています。この 4 年間で私たちは、週に 1 度のミーティングの中で、どうすれば私たちにたくさんの学びを与えてくれたアジア学院の魅力をより多くの人に伝えることができるかを考えてきました。

今後はますますアジア学院との関係を大切にして、私たち学生にできるやり方でアジア学院に恩返ししていきたいと思っています。」

日帰りプログラムが好評

アジア学院を知るはじめの一歩

2019年度は例年になく多くの見学者が訪れた年でした。6月から12月までの半年間で20団体、個人も含め延べ400人以上の来校がありました。ホームページとフェイスブックによる広報だけで、これだけ多くの方が参加してくださり、今後もこのような潜在ニーズを掘り起こしていける可能性が十分あるという手応えを感じています。

この日帰り見学を推進した背景には、昨今減少傾向にある募金への危機感がありました。年々減っていく寄付金を補っていくためにも、一般向けのプログラムを強化し、ファンドレイジングの主軸へ発展させていくべきだという話し合いが担当職員間で交わされました。日帰り見学はその中でもアジア学院へ来たことがない人向けのプログラムです。これを入り口としてさらに深くアジア学院に関わってもらうためにも、ここからテコ入れしようと考えたわけです。

団体見学者は今まで通り随時受け入れを可能としました。一方、今まで明確な受け皿がなかった個人見学者のために、月に一度の定期見学会の日を設けました。内容も見直し、キャンパスツアーとランチのみのシンプルな構成にしつつも、教育コンテンツとして満足度の高いものになるよう工夫をしました。例えば、キャンパスツアーは、単に「アジア学院の紹介」を目的に行うのではなく、今ある社会課題とどう向き合うのか、生き方を問う「学び」を目的として捉えるようにしました。ガイド内容も参加者の関心テーマに合わせて細かく微調整をします。さらに、ツアー後のランチでは、共同体の食卓に同席してもらうことの意味を明確にし、ツアーで見聞したことの一端を五感で体験できるよう、さりげない示唆と誘導を欠かさないようにしました。実際に行ったことは小さな改善ばかりですが、目的意識を変えると伝え方が大きく変わりました。おかげさまで参加してくださった方々から「とてもわかりやすかった」「よい学びをさせてもらった」など高評価をいただくようになりました。

今後も日帰りプログラムを継続し、さらに洗練できたらと考えています。また、一度参加してくださった方が繰り返し参加したくなるような魅力的な新プログラムも企画していくつもりです。アジア学院には長年培ってきた豊かな教育的資源が満ち溢れています。それをファンドレイジングに活かさない手はありません。今までのアジア学院は、主に途上国の農村指導者のためのものでしたが、これからはもっと地域社会や日本国内、あるいは他の先進国の人々にも開かれていくでしょう。それは、新しく訪れた人々にとってはまたとない学びの機会となるでしょうし、アジア学院には、新しい仲間が増えることで資金調達以上の恩恵をもたらしてくれるはずです。日帰り見学は、私たちが目指す世界の入り口としてすべての人に門戸を開いています。

キャンパスツアーでは学院の活動について広く学ぶことができる

八木沢 淳
募金・国内事業課
（募金・広報・教育プログラム）

コイノニア食堂でアジア学院メンバーとランチを楽しむ参加者

SPOTLIGHT

販売事業開始から最大の売り上げ

販売部門報告

佐藤 裕美
募金・国内事業課
(販売・庶務・広報)

2019年度
ベスト売り上げ商品

第1位	豚肉	3,156,465円
第2位	卵	2,010,880円
第3位	にんじんジュース	1,976,634円

2019年度は、多くの新しい試みを経験する1年でしたが、おかげさまで大変実りの多い年となりました。日本人研究科生の受け入れ、大規模イベントへの出店、折に触れアジア学院内外の皆様にご協力いただくことができた結果、販売事業を開始して以来最大の売上額(1200万円)を達成することができました。

素材の味を生かす

新しい商品として燻製大豆、100%ニンジンジュースを試作し、対面にて顧客の反応を伺うことができる利点に着目し、その商品に対して興味を持つ方が多いであろうイベントなどで販売しました(フジロックフェスティバルNGOビレッジ、那須拓陽高校オダイズ祭、県内の有機農産物マルシェ等)。

製造工程を委託したり、原料在庫の調整を見極めた上での製造となるので、常時販売できるか否かは今後の課題ですが、購入者の方からは素材の味が生かされている、大変おいしいとご好評をいただくことができました。いずれの商品も原材料はすべてアジア学院の農作物、あるいは加工品を利用しているところが特徴です。また、燻製大豆については、日本人研究科生の小林薫さんが製造開発から販売までを一貫して企画し実施しましたが、それをサポートする販売関係職員にとっては新しい気付きを得る大きな学びの機会となりました。

味と安全性に定評があり潜在的需要が見込める米や豚肉などの定番商品は、提携販売対象品としてご愛顧いただけるよう、また「アジアの土」を購読くださっている支援者の皆様とつながりを深める手段として、地道な広報活動を継続しました。

健康セット

年度末に発生した新型コロナウィルス感染症拡大に対応する「アジア学院 健康セット」というキャンペーン販売を企画実施しました。刻々と変わる状況を鑑み、速やかなSNSでの広報を行ったことが功を奏し、大変多くの方からご注文と応援メッセージを頂きました。学院来訪者数が激減し、さらに定期購入者様の共同購入の機会である集会や教会の礼拝がキャンセルされたため在庫超過が懸念されましたが、お買い物などの外出を控えたい方のご希望に添える商品内容と期間限定での価格設定で好評を得ました。

アジア学院のモットーである「共に生きるために」に根ざした販売活動の在り姿とは何か、日々の業務に携わる皆で学び合うことが、多くの方の喜びに繋がればと願っています。

(1) 人気の「健康セット」
(2) 新商品「燻製大豆」
(3) フジロックフェスティバルに出店
提供：フジロック・NGOビレッジ

1

2

3

サポーターと共に

(1) 最終日は近江兄弟社高校で講演
(2) 全寮制のキリスト教愛真高校では寮に宿泊し、生徒たちと有意義な時間を過ごしました。

西日本キャラバン

10年目を迎えた西日本キャラバン
今年はキリバスと日本の卒業生が健闘しました。

八木沢 淳
募金・国内事業課
（募金・広報・教育プログラム）

西日本各地の支援者との交流を主目的に行われる西日本キャラバンが、今年度で10周年を迎えました。担当職員2人にキリバス出身卒業生のテベレタアケ・トカンテタアケさんと日本人卒業生の小林薫さんを加えた4人でチームを組み、11月2日から14日まで13日間、学校や教会を中心に25ヶ所を巡り、全32件の授業や礼拝、交流会に参加しました。

それぞれの場所によって、訪問する目的も違えば交流の形も様々です。時には教会の集会所でアットホームなお話会を行うこともあれば、1000人以上の学生を前に講演を行なったり、大学での講義やワークショップを行ったりすることもあります。初参加のメンバーにとっては、このように多種多様な場への対応は、楽しみでもありプレッシャーでもあっただろうと思います。

そんな中、テベレタアケさんの育ての親で唯一の肉親でもあった御祖母様が死去されるという悲しい知らせが届きました。動揺し悲嘆にくれるテベレタアケさんでしたが、気丈に悲しみを隠し、「アジア学院の役に立ちたい。サポーターの期待に応えたい。」そう言って、全ての行程を続行してくれました。行く先々で出会う方々からの熱烈な歓迎と声援が、彼女の大きな励みになったに違いありません。

今回は例年よりも規模を縮小しての実施でしたが、その分、各先での滞在時間が長くなり、より深い交流の時を持つことができました。最も遠路で初訪問だった島根県のキリスト教愛真高校では、寮に宿泊させていただき、生徒たちと長時間にわたり印象深い交流をさせていただきました。今後も各地でアジア学院とより親密な関係へ発展していくことを期待しています。

財政面では、ウェスレー財団から助成金をいただき、交通費などの費用が大きく軽減されました。しかしながら、資金調達、関係構築、啓蒙活動など複数の目的を含むこの活動において、いかに費用対効果を最大化していくかは、今後も大きな課題です。

西日本キャラバンでお世話になった方々（順不問・敬称略）

学校関係
近江兄弟社高校、同志社大学、同志社国際学院初等部、大阪女学院（短期大学、高校）、関西学院大学、関西学院中学部、聖和短期大学、頌栄短期大学、啓明学院（中学校、高校）、キリスト教愛真高校

教会関係
岐阜教会、岐阜バプテスト教会、名古屋ユニオンチャーチ、アシュラムセンター、京都上賀茂教会、洛西教会、神戸ユニオンチャーチ、甲東教会、神戸栄光教会、宝塚教会、天国屋カフェ

諸団体
古民家ろっきゃお、大阪南 YMCA

個人
武井陽一、丸谷一耕、見満紀子

杉山さんとパトリック・クリエ

あすなろ奨学基金、5年目を迎える

「あすなろ奨学基金」の杉山雅英さんの
メッセージをお届けします。

2014年7月に私の父（杉山 愛行）がなくなり、遺産を受け継ぎました。1920年に祖父（杉山 千波）が長野県から西那須野町に入植し、小学校の教師として働き始め日本基督教団西那須野教会の会員となって95年、父の死をもって西那須野での我が家の歴史の一つのステージは閉じることとなりました。私達はその遺産を自分達の為に遣うわけにはいかないと考え思案の後、2014年10月に夫婦二人の心に浮かんだのがアジア学院の働きでした。内外に素晴らしい評価もあるアジア学院に、そこに招かれる学生を支援するための「あすなろ奨学基金」を設立したのです。愛の種が蒔かれ、彼ら自身、彼らの地域、ひいては彼らの国の発展の一助になるならばこんなにワクワクすることはありません。

2015年から2019年までの5年間にアジアから4名、アフリカから1名の若者たちを支援しました。

「5人の若い友人たち！」その後 どうしていますか？アジア学院で得た学び、友人たちとのつながりが今後のあなたの人生をひろげ、一層豊かにしてくれることを私達は願っています。

杉山さんご夫妻とモハメド・ノーシャド・イルファナ・ベガン

あすなろ奨学基金の支援を受けた学生

2015	モハメド・ノーシャド・イルファナ・ベガン（スリランカ）
2016	サンゲイ・ワンディ（ブータン）
2017	エメリンダ・オンカル（フィリピン）
2018	プロケン・パンソ（インド）
2019	パトリック・クリエ（リベリア）

国内支援団体

（10万円以上の寄付・順不問）

奨学金
東京南ロータリークラブ、日本キリスト教協議会、日本基督教団国際関係委員会、（カ）聖コロンバン会、（カ）聖心会（あけの星修道院）、（一財）アジア農村交流協会、（一財）新倉会、（一財）日本福音ルーテル社団、（一社）東京アメリカンクラブ、（公）東京聖テモテ教会聖テモテ奉仕奨学金委員会、（独）日本学生支援機構(JASSO)、（公信）久保田豊基金

学校
（学）女子学院、（学）青山学院中高等部、（学）明治学院

諸団体
学生キリスト教友愛会、全国友の会中央部、東京霞ヶ関ライオンズクラブ、ワールドファミリー基金、（医社）サマリヤ会、（一社）アジア婦人友好会、（一社）わかちあいプロジェクト、（公財）あしぎん国際交流財団、（公財）ウェスレー財団、（公財）全国友の会振興財団、（公財）森村豊明会、（宗）立正佼成会那須教会、IKE設計開発事務所、帰農志塾

教会関係
河内キリスト集会、神戸ユニオンチャーチ、国際基督教大学教会、東京ユニオンチャーチ、（カ）援助修道会、（教）阿佐ヶ谷教会、（教）西那須野教会、（公）聖アンデレ教会、（公）聖オルバン教会、（公）東京聖三一教会、（教）早稲田教会、横浜ユニオン教会

海外支援団体

（10万円以上の寄付・順不問）

諸団体
アジア学院北米後援会(AFARI)、テキサス・クリスチャン大学（米国）

奨学金
アメリカ福音ルーテル教会(ELCA)、合同メソジスト教会世界宣教（米国）、Hartstra Foundation（オランダ）、Lifehouse（フィリピン）、英国メソジスト教会（英国）

教会関係
カナダ合同教会、合同メソジスト教会世界宣教、米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教、Evangelical Mission in Solidarity（ドイツ）

海外ボランティア派遣団体

Brethren Volunteer Service（米国）、Social Peace Service Kassel, e.V. (SFD)（ドイツ）、United Methodist Church Global Ministry（米国）

インターン派遣団体

国際基督教大学、ウェルズリー大学（米国）、セントオラフ大学（米国）、ウィルミントン大学（米国）

（医社）医療法人社団、（一財）一般財団法人、（一社）一般社団法人、（学）学校法人、（カ）カトリック、（株）株式会社、（キ）日本キリスト教会、（教）日本基督教団、（公）日本聖公会、（公財）公益財団法人、（公社）公益社団法人、（公信）公益信託、（財）財団法人、（社）社団法人、（宗）宗教法人、（特活）特定非営利活動法人、（独）独立行政法人、（福ル）日本福音ルーテル教会、（バ連）日本バプテスト連盟

ゴシェン大学を訪問する荒川校長

ウィメンズ・カンファレンス参加者

アジア学院の力の源

アジア学院の財務面、教育面、精神面の全てを支える国際的な関係

ケイトリン・オキン
国際関係ボランティア

キャシー・フローディ
国際関係課長

アジア学院は、日本国内や世界中の人々を訪問し、また訪問を受け入れることで、サポーターやパートナーと豊かな経験を分かち合っています。 2019 年度の訪問について、その一部をご報告します。

アジア学院での特別研究休暇

2019 年 2 月から 7 月上旬にかけて、ネブラスカ州オマハのクレイトン大学からサマンサ・センダ＝クック教授がアジア学院に約 4 か月間滞在されました。センダ＝クック氏は、環境に関する意思疎通が自然界に関する人々の認識に与える影響について研究されています。以前のご訪問の際、アジア学院の食と平和との関係を構築する方法に衝撃を受けたと言います。今回の滞在では、アジア学院の構成員が食をどのように認識しているかについて研究されました。その結果、食の重層的な意味、そしてそれがコミュニティ構築、公正、さらには癒しを促す仕組みを発見されました（詳細は紀要 euodoō（ユオードー） 第 4 号に掲載）。

ご自身の研究に加えてコミュニケーションに関するワークショップも開催していただき、アジア学院や地元のコミュニティで私たちがいかに生きるかについて理解を深めることができました。

荒川校長 米国ミシガン州、インディアナ州を訪問

9 月、荒川朋子校長と AFARI（アジア学院北米後援会) 理事のベブ・アブマ氏が、アブマ氏の長年の同労者であるサポーターおよび潜在的なパートナーを訪問しました。

訪問地のひとつは、インディアナ州のゴシェン大学のコミュニケーション学部です。2023 年に控えるアジア学院 50 周年のためのドキュメンタリー・フィルムでの提携について協議しました。またキャンパス内で行った学生対象のプレゼンテーションでは、環境研究の学生数名がアジア学院訪問への興味を示してくれました。

ミシガン州のフェッツァー・インスティテュートでは、荒川がアジア学院の平和と和解への取り組みについて説明しました。カリキュラムやスタッフ研修におけるこのトピックの発展のための協力に大きな関心が表明されました。

また、荒川は支援を頂いているフレンドシップ・コミュニティ改革教会を初めて訪問して励ましを得たと言います。「宣教チームおよび新しく就任した牧師に出会い、彼らが関心をもっていることについて学び、アジア学院のことをお話しできたことは大きな恵みでした。」

2019 年度 ウィメンズ・カンファレンス

ウィメンズ・カンファレンスでは、日本人・海外出身者を含む日本に暮らす 50 名以上の女性が一堂に会しました。その多くは牧師、宣教師、教師であり、アジア学院の多くのパートナー教会（東京ユニオンチャーチ、ウェスト東京ユニオンチャーチ、横浜ユニオン教会、聖オルバン教会、神戸ユニオンチャーチ）から集まりました。

カンファレンスでは「Seeing Love in Change」を主題としました。アジア学院のコミュニティは、農場の作物を用いた手作りの食事を提供し、会場を準備し、交通手段を提供することで愛とホスピタリティを示しました。参加者は、フードライフワーク、キャンパスツアー、卒業生とのディスカッションへの参加を通してアジア学院の使命とビジョンを学び、学院の研修がどのように農村のコミュニティに愛と希望をもたらしているかを知ることができました。

ウィメンズ・カンファレンスをアジア学院で開催することを提案してくれたのは、学院の元職員である大場サラ氏です。大場氏とカンファレンス・コーディネーターの佐藤氏の素晴らしい働き、そしてアジア学院のコミュニティの働きによって、第 62 回のウィメンズ・カンファレンスは無事成功に終わりました。

RESEARCH

エネルギー使用調査の結果とその今後の方針

荒川 朋子
校長

アジア学院はこれまでも、様々な自然エネルギーを活用したり、化石燃料を使う方法に頼らない代替技術や適正技術 (注 1) の導入を行ってきました。それは、時代の流れに逆らって何が何でも自然エネルギーを使わねばならないという肩に力の入った取り組みというよりは、自然のリズムと調和した生き方を追求するアジア学院の生活の中では、ごく当たり前の流れでありました。同時に、一般的なエネルギー設備の導入が困難であったり、関連コストが高い学生たちの地域の現状を考えても、これは理にかなった方法なのであります。

しかし、１年のうち８か月以上の期間で 60 人近い人間が共同生活をするキャンパスで、電気もガスもなしで生活することは不可能です。10 年前の福島第一原発の放射能漏れ事故による被害を受け、自分たちのエネルギー問題と正面から向き合うことになった私たちは、再建した建物には太陽熱を利用した床暖房および給湯設備を導入し、限られた範囲ではありますが太陽光発電も行い、さらに壁や窓には断熱性能の高い資材を使用し、冬期の暖房のための灯油の使用量を格段に減らしました。とはいえ、私たちが依然として化石燃料に依存して生活をしていることはぬぐえない事実であります。

学院のエネルギー使用を計る

昨年、アジア学院では環境省の補助金を得て専門家に協力を仰ぎ、寮を除く学院内の全施設でどれくらいのエネルギーを使用しているかの調査を行い、CO_2 削減のための提案をしてもらいました。その結果は表１～３の通りで、アジア学院は１年間で 75 トンの CO_2 を排出していることが分かりました（寮のエネルギー使用を除く）。電力に関しては、給水ポンプ（井水、上水）が全体の 22%、冷凍・冷蔵庫が 19% と、この２種類の設備で全体の 40% の電力を使用していることが分かりました。

この結果に基づき、専門家からは CO_2 削減に向け 10 の具体的な提案がされました。冷凍庫など電力使用量の大きい設備・機器の設定温度を変えたり、電気効率の良い最新のタイプのものに買い替えるといった比較的実行しやすいものから、電力の低炭素化を図るために太陽光発電の導入による自己発電の提案など、大きな投資が必要なものもありました。これら 10 のすべての提案を実施すると 26 トンの CO_2 を削減できるという試算がされました（表 3）。実施するためには多額の投資が必要で、一度に実行できるものではありませんが、徐々に着手していきたいと考えています。

スウェーデンの 17 歳の少女、グレタ・トゥーンベリさんの発言と行動が話題になりました。彼女の心からの叫びによって、多くの人が地球温暖化はもはや他人事ではなく、まさしくひとりひとりの問題で、待ったなしの課題であることに気づきました。アジア学院も改めて自分たちのエネルギー使用を見直し、前記の提案を実行に移していくことに加え、以下のことに尽力していきたいと考えています。

① 高い食料自給率（90% 以上）の維持

家畜の飼料を含む食料の自給をこれまで通り継続し、低フード・マイレージ (注 2) を保ち、食料生産と消費のために必要な CO_2 の排出量をできる限り抑えます。

② ゴミの削減・分別強化とリサイクルの奨励

ゴミになるもの、特にプラスチック製品の外部からの持ち込みを減らし、資源のリサイクル率を上げるためにゴミの分別をさらに強化します。またリサイクルできるものを今よりも工夫して使用します。

③ ひとりひとりの意識改革

アジア学院に生活するひとりひとりが、各々の水、電気、ガス等の化石燃料の使用を意識することで、学院全体のエネルギー使用量を減らします。

（注 1）適正技術 : 環境への影響、生産施設、技術の現状、労働力、市場規模、文化的・社会的環境など関連するすべての面から、開発のための技術的ニーズを満たすうえで最も適切な技術をいう。

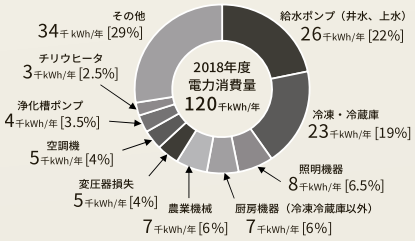
（注 2）フード・マイレージ (food mileage) は、「食料の (food) 輸送距離 (mileage)」という意味であり、食料の輸送量と輸送距離を定量的に把握することを目的とした指標ないし考え方である。食料の輸送に伴い排出される二酸化炭素が、地球環境に与える負荷に着目したものである。食品の生産地と消費地が近ければフード・マイレージは小さくなり、遠くから食料を運んでくると大きくなる。

(表 1)　エネルギー別年間 CO_2 排出量と年間コスト（2018 年度実績）

エネルギー種別	使用料	CO_2排出量*	費　用	比　率
購入電力	107千kW/年	51 t-CO_2	2,268,000円	67%
灯油	6.1kL	15 t-CO_2	586,000円	17%
LPガス	1.4千m³	9 t-CO_2	528,000円	16%
合計		75 t-CO_2	3,382,000円	

*電力については各電気事業者の基礎排出係数を用いて算出

(表 2)　主要機器別電力消費量（2018 年度実績）



(表 3)　CO_2 削減に向けた 10 の対策案

工程名	対策名称	削減量(t-CO_2)	削減率	導入コスト
井水供給	漏水対策による井水ポンプの消費電力の削減	7	8.9 %	未確定*
食堂、食品加工所	冷凍庫の設定温度変更	1	0.8 %	0円
太陽熱ヒーター	床暖房用循環ポンプの夏期、中間期の停止	0	0.5 %	0円
食堂、食品加工所	冷凍庫、デフロスト周期の適正化	0	0.4 %	0円
食品加工所	１階イモ保管室空調機のフィルター、フィン清掃	0	0.1 %	0円
キュービクル	変圧器の更新と容量の見直し	2	2.2 %	500,000円
食堂、食品加工所	定速式冷凍庫のインバーター式への更新	2	2.1 %	1,400,000円
照明設備	LED照明導入による消費電力の削減	2	2.0 %	1,183,000円
食品加工所	１階イモ保管室用空調機の老朽化更新	0	0.3 %	200,000円
太陽光発電・蓄電	太陽光発電導入による消費電力の削減	12	15.0 %	4,100,000円
推奨する対策の合計（省エネ・燃料転換・再エネ発電）		26	32.0 %	7,383,000円

*アジア学院により試算中

アジア学院のフードライフ

気候変動と有機農業

野菜・作物部門報告

櫻井 将伸
フードライフ課（野菜・作物）

2019 年度
主な農作物の生産量

米	6,482 kg
小麦	4,232 kg
じゃがいも	74 kg
さつまいも	737 kg
大豆	1,802 kg
にんじん	366 kg
かぼちゃ	276 kg
たまねぎ	476 kg
にんにく	47 kg
エゴマ	31 kg
キウイ	64 kg
ブルーベリー	13 kg

地球全体規模での深刻な気候変動問題が取り沙汰されるようになって久しいです。2015 年の国連サミットで採択された「持続可能な開発目標」（SDGs）の中にも「気候変動に具体的な対策を」というものがあり、目標達成期限と定めた 2030 年までに何らかの有用な対策を講じることが求められています。

2019 年のアジア学院でも、一部の野菜・作物では思うようにその栽培を管理することが難しい状況となりました。春先には地下水の水位低下に伴い、田んぼへ入れる水の確保のために難儀しました。夏場の極端な暑さや時折生じた集中豪雨の他にも、昨年は秋冬野菜の苗の定植がやや早すぎたことに加えて残暑の影響も重なり、キャベツやハクサイは害虫による食害を被りました。収穫適期直前の台風でエゴマの収量は激減しました。さらに今年の暖冬による降雪不足から雪解け水が地下に溜まらず、また水不足になることを心配しています。

反面、職員の有機栽培技術向上によって収穫量が増加した農産物もありました。コメ、ナス、カボチャ、ジャガイモなどです。いずれの作物でも少なからず一度は栽培に失敗しましたが、その度毎に原因の究明を試み、そして栽培方法の改善に努めてきました。大自然と真摯に向き合い、試行錯誤を繰り返してきた結果が収量増加につながったのです。しかし昨今の気候変動により、季節のめぐりが不規則な今、タネの播き時、苗を本田、本畑に定植する時、そして収穫する時を、今まで以上に見極めることが重要となってきました。昨年と同じ栽培手法では通用しないことも考えられます。

実り豊かな収穫を得るためには、一粒のタネを畑に播くことから始まります。時事刻々と状況を変化させるのが常である自然と対話し、最適な栽培手法を導き出し、実り豊かな収穫を得る。難しいですがやりがいもあります。だから有機農業は面白いのです。

KEY CONCEPT

災害に強い フードライフ

自然のもたらす恵みなくしては、人間は一秒たりとも生きていくことができません。空気、水、太陽、森、川、海、土...。生きとし生けるものがこの見事な自然の生態系のバランスの中で生きています。しかし近年のこの自然の法を無視した過度な資源開発や経済活動、技術革新が地球の環境を脅かしています。気候変動に伴う自然災害が多発し、常態化する中、災害に強いライフスタイルを確立することが急務です。では、気候変動や他の災害にも強いライフスタイルとは何でしょうか？

まずは水の確保です。学院は那須塩原市からの水と井戸水に頼っています。この辺りには湧き水や浅井戸が多く、これを日ごろから農薬や化学肥料で汚染しないことが重要です。

次に食料を自給することです。食料を海外からの輸入に頼っていたのでは、何かがあって店頭から食料が消えた時、成す術がなくなってしまいます。学院では食料自給率は常に90%以上で、主食の備蓄米が常に一年分以上あります。

生物多様性を育む農業と国連の推奨する小規模家族農業も、大規模単一作物栽培に比べれば災害に強い農業です。大規模単一作物栽培では、ひとたび気候条件が合わなくなれば、その作物は全滅してしまいます。いろんな野菜作物をいろんな場所で栽培していれば、そのうちのどれかが被害を免れる可能性が高まります。小規模の家族農業であれば、様々な場所に農地が点在し、平地の作物が全滅しても中山間地のそれは助かるかもしれません。

里山の保全も重要です。森林には保水力があり、洪水渇水緩和、水質浄化に効力を有します。また土壌保全、土砂災害防止、防風、防音、塵埃の吸収も期待できます。そして二酸化炭素を吸収し温暖化を抑制します。また、木を炭にして土壌に施せば土壌を改良すると同時に炭素を永久的に土に閉じ込めることができます。

災害に強いフードライフを実現するためにはエネルギー自給など、できることはまだたくさんあります。学院は真のフードライフを実現できるよう、共に成長してゆける場を提供していきたいと願っています。

荒川 治
副校長・フードライフ課長（農場長）

豚伝染病対策と山羊肉の利用

畜産部門報告

大谷 崇
フードライフ課（畜産）

豚の伝染病である豚熱が26年ぶりに国内で発生、感染が拡大していましたが、９月には関東に侵入、養豚部門では、その対策に追われました。将来義務付けられると考えられる豚舎回りの防護柵の設置のほか、豚舎周辺への関係者以外の立ち入り禁止措置、閉鎖された環境での発酵飼料の準備、石灰による消毒などを継続して講じました。しかしそれ以降も各地で散発的に発生する感染や、防護柵の設置などを巡って振り回されています。今後、予防的ワクチン接種も実施されることになりました。

新たな取り組みとしては山羊部門で初めて雄山羊の屠畜を実施、山羊肉・内臓への加工を行いました。多くの学生が母国では山羊肉を主食としており、HTC（収穫感謝の日）だけでなく、日常の調理の中でも幅広く活用されて喜ばれました。搾乳頭数も５頭に増えると同時に、乳量も昨年の３倍を超え、牛を飼育していた時よりもミルクの供給量が多くなりました。購入飼料に依存せず、飼料自給率100%を確立しながら、安定した乳量を今後とも確保するため、桑樹の挿し木による増殖や牧草地の育成に努めています。冬場の山羊の飼料は放棄地の竹の葉が主になりますが、山羊が葉を食べた後、細枝は粉砕して鶏舎の敷料に、稈は畑の杭にと、余すことなく活用しています。

養鶏部門では産卵鶏に加えてブロイラーの飼育を実施、学院内で発生するふすまを飼料として活用し飼料代を抑制することが出来ました。またコンポストの堆肥化熱を活用した育雛システムや、卵が転がる産卵箱などの新しいシステムを導入しています。

家畜以外では畜舎周辺の森林の活用の検討を始めました。それぞれの木に名札をつけて、地域資源の一つとしての理解を深めるとともに、将来的には瞑想の場所として貢献できることが期待されています。

2019年度 主な畜産物の生産量

養豚：	肉	71 頭
鶏：	たまご	99,664 個
	肉	411 羽
山羊：	ミルク	1,768.9 ℓ
	肉	52.2 kg
	内臓	16.0 kg
養魚：	魚	26.5 kg

家計の向上

FEAST（給食）部門報告

ザチボル・ラコー・ドゾ
フードライフ課（FEAST）

2019年度
コイノニア食堂で
提供した食事の数

37,923 食

2018	44,433 食
2017	34,811 食
2016	38,142 食

「アチボさん、唐辛子入りの辛い料理を作って！」新年度が始まり、新しいコミュニティメンバーと関係を作っていくときにはいつも、このような会話でコイノニア（食堂）の空気が大変アットホームで居心地の良いものになります。しかし現実には、1年間の仕事をどうこなしていくかについて考えるといつも圧倒されています。それでも最終的には、誰もが新しい環境に適応し、アジア学院のキッチンで共によく働くのを見て感激するのです。

私たちはこのキッチンから、安全な食べものと安全でない食べものについて、またアジア学院がなぜ有機農業を行っているのかについて学びます。学生は、栄養学の授業と調理の実践を通して、自身の食生活と故郷の共同体での食物摂取のことを振り返ります。これによって安全な食べものとは何かを学ぶことができるのです。安全な食べものを使ったバランスのよい食生活を実践すれば、病気のリスクを減らすことができます。それによってお金を節約でき、結果的に家計が改善します。家庭においてシンプルながら安全な食生活と平和な生活を維持していくことは、何より大きな家族の財産なのです。

この目的のため、FEASTは長年にわたって自給自足を実践し、自給率を大幅に向上してきました。今年度取り組んだことのひとつは、学外からの食材購入を削減し、学生に対して学院の農産物の自然な味を味わうことを奨励したことです。着目した点は、FEAST（給食）部門と農場部門との関係改善と、健康や家計の改善のための食の管理です。

今年度は特に大きな達成感を得ることができました。多くの学生がキッチンと農場の両方の価値を理解することができました。実際、私がFEASTコーディネーターを務めてきた中で、2019年度の学生は健康管理が最も優れており、故郷の共同体での健康問題についての意識も最も高いグループでした。

卒業生とのつながり

2020 年の ARIGA ミャンマー会議の前に卒業生ザ・ベット・タン（13 年卒・左）とヨー・リン（16 年卒・右）と再会するカッティング

アジア学院ファミリーのつながりを維持する

卒業生アウトリーチ部門報告

スティーブン・カッティング
卒業生アウトリーチ課長

2 年前、アジア学院から「卒業生アウトリーチ」という新部門の開発を依頼されました。9 年間に及ぶアジア学院職員としての経験があり、また 2 年間にわたる卒業生影響度調査に携わり、12 ヶ国にまたがる 200 人を超える卒業生に出会ったことが、私へのこの任務の依頼につながったのだと思います。この調査は、2013 年のアジア学院 40 周年の際に、卒業生とアジア学院との関係を強化したいとの卒業生による要望を受けて行われたものです。その際、アメリカのヘイル一家からのご寄付があり、卒業生アウトリーチ部門の設立が実現しました。

任務を受けてすぐに気付いたことは、この業務はすべて「つなぐ」ことに関するものであるということです。アジア学院は世界中に散らばった家族のようなものです。これは、キャンパスで生活を分かち合い、また生活を変革する経験を分かち合う中で強い絆を作り上げることから始まります。そして卒業後、その家族は世界に広がり、新たなものに変貌します。物理的な距離は広がりますが、つながりは続きます。しかし卒業生は、自分の日常に戻ることでアジア学院ファミリーとの距離が広がったように感じることもあるかもしれません。そこで、この家族のつながりを維持する方法を編み出す取り組みが始まったのです。

リープフロッグ（飛びガエル）型発展

テクノロジーにより、グローバルなコミュニケーションは昔と比べて遥かに容易になっています。もちろんメールもありますが、卒業生は Facebook や WhatsApp の方を好みます。リープフロッグ型（新興国が先進国の遂げてきた発展過程を一段飛びで抜かすこと）のテクノロジーの発展により、農村の人々にとってスマートフォンは電話回線やインターネットよりも気軽に手に入るものとなりました。卒業生アウトリーチはこれを活用して、Facebook で卒業生アウトリーチのページを開設し、

シエラレオネにて 2018 年度卒業生マンブッ・ケスティン・サマイ（右）と

インドネシア会議後、植木するラシータ・ウダヤ・クマラ（08 年卒）と石田堅吾（12 年卒）

ニュースレターの「Network」を電子媒体としました。このニュースレターは 30 年以上にわたり郵送で届けられており、卒業生がアジア学院とつながる唯一の生命線でした。しかし卒業生はデジタルへの移行を喜んでいます。これにより確実に、最新のニュースを届けることができます。

世界に広がる学びの共同体

アジア学院は学びの共同体です。教師と学生の役割は分けられていません。私たちそれぞれに教えられ、それぞれに学ぶ機会があるためです。卒業生アウトリーチを通じて、このダイナミクスは「ARI and Graduate Knowledge Base（アジア学院・卒業生知識ベース）」というオンラインシステムによって続いていきます。これは一種の「ウィキペディア」（インターネット上の参加型百科事典）であり、卒業生は具体的な方法や技術の情報を交換したり、アジア学院での学びを各自のコミュニティに適合させた方法を紹介することができます。これまでのトピックには、有機農業、食品加工、農民グループの形成、女性のエンパワメントなどが挙げられます。唯一の条件は、「どうやるか」、より正確に言うならば「自分たちはどうやっているか」について書くということです。例えば、ぼかし肥の作り方については、アジア学院での方法、カメルーン、インドネシア、フィリピンでの方法といった複数のページがあります。原理は一緒でも、具体的な技法や材料は異なります。このように、アジア学院の学びの共同体は、各地での創意工夫とデジタルテクノロジーと合体して、拡大、継続しています。

このような学びの共同体の拡大は、アジア学院のカリキュラムに卒業生セミナーが加えられたことからも見て取れます。毎年、共同体形成において豊かな経験を持つ 2 人の卒業生を招き、自身の仕事について、帰国後の第一歩に焦点を当てて話してもらいます。研修プログラムが終盤に近付くと、学生は「アジア学院のアイデア」をコミュニティにどのように適用できるのかについて不安を感じ始めます。卒業生たちがどのようにそれを達成したのかを事前に知ることは励ましになります。ある学生はセッションの終わりにこう言いました。「ありがとう。ようやく行く先が見えました！」

グループ・ハグ

人には、「ただ抱きしめてもらうだけでよい」という時があります。その人のことをよく知り大切に思っている家族以上にその役割に適した人がいるでしょうか。アジア学院の卒業生は地域の人々の暮らしを改善するために献身しており情熱を持っていますが、貧困、気候変動、戦争、汚職など、数えきれない障害に直面しています。そこで、一人ではないということを確認するためにテキストメッセージや通話で交流するのです。卒業生アウトリーチは、このサポートネットワークを拡大することでこのハグ（抱きしめ合うこと）に加わります。実践的なレベルでは、会議、資金調達機会、同じ志を持った機関などの情報を卒業生につないでいます。「教えてもらったワークショップに申し込みました」「小規模助成金に応募しました」などといったメッセージを受け取るのは嬉しいことです。より個人的なレベルでは、Graduate Stories（卒業生ストーリーズ）というオンラインプラットフォームを創設しました。卒業生から体験やレポートを送ってもらい、誰でも読める場所にアップロードしています。これは卒業生の生活や活動の生きた記録であり、世界中に散らばったこの家族を結び合わせ続ける方法のひとつです。

Graduate Stories は、アジア学院の卒業生の働きに関心のある方はどなたでもご覧いただけます。
https://scrapbox.io/ARI-Graduate-Stories/

タンザニアの卒業生たちと

GRADUATE STORY

ARIGAと卒業生間協力

アジア学院同窓会（ARIGA）は、国または地域レベルでの卒業生の集まりであり、アジア学院ファミリーの地域支部です。各 ARIGA は、交わりやネットワーク、近況報告、そして「アジア学院の精神を生かし続ける」ことを目的として、各自の裁量で定期的な会合を開催しています。最も古い ARIGA は 30 年以上前にスリランカで結成され、今なお根強く活動しています。最も新しいものはガーナで 2 年前に結成されました。本年、卒業生アウトリーチ担当のスティーブン・カッティングは 2 つの ARIGA の集会に参加する機会を得ました。

卒業生による国際会議
（インドネシア・北スマトラにて）

2019 年 11 月 5 ～ 8 日

この会議は大変印象的なものでした。トバ湖の岸に位置するパラパットという美しい村を開催地とし、世界中のすべての卒業生を招待し、7 ヶ国から 32 名が出席しました。企画は北スマトラで活躍する卒業生、協賛はバタック・プロテスタント教会で、主題は「Food, Justice and Reconciliation（食べものと正義と和解）」としました。プロジェクト現場へのツアーでは卒業生の仕事について直接学ぶことができ、活発な質疑応答がありました。例えば、参加者はある共同体において、採油済みのアブラヤシを用いてブラウンシュガーを作る方法を視察しました。スリランカのラシタ・クマラは、自分の所にもアブラヤシはあるものの採油後には廃棄しているため、この方法を導入したいと言います。ガニ・シラバンのコーヒー農場への訪問においては、オーガニックコーヒーの栽培方法のみならず、強固な農家協同組合の運営についても教えられました。ガニはインドネシア、フィリピン、ミャンマーでコーヒーを栽培する他の卒業生と積極的に交流しています。これらの卒業生は、農業技術、マーケティング、そして協同組合運営について情報交換を行っています。

ARIGA ミャンマー

2020 年 2 月 25 ～ 27 日

エーヤワディー川デルタ地域の有機農業研修センターで行われた ARIGA の会合は、家族の集まりのような時となりました。ほとんどの卒業生が互いをよく知っており、初参加の者も温かく迎えられました。参加した卒業生たちは、仕事のことに加えて各自の困難についても分かち合いました。例えばある若い女性の卒業生は、農業研修のセッションを行っていた際に警察から政治運動家とみなされ逮捕された経験を語りました。参加者は深く傾聴し互いに理解し合いました。これこそ皆が求めていたことなのです。

この会合のほかにも、ミャンマーの卒業生はそれぞれの共同体の作業において頻繁に協力し合っています。ミャンマー中心部に暮らすビャ・サムイェは、ザ・ベット・タンの暮らす僻地の村までバイクで一日かけて旅し、持続可能な林業について指導しました。逆に、ザ・ベットは同級生のノー・エー・リー・トゥの共同体において有機農業のワークショップを行うために長距離を旅しました。文字通り「草の根」の指導者として、卒業生たちは互いにつながることによって強められています。協働して変革のための大きな力となるのです。

アメリカ福音ルーテル教会（ELCA）の支援によるインドネシア研修

2020 年 2 月 24 ～ 28 日

アジア学院は、アメリカ福音ルーテル教会（ELCA）のご支援により、2020 年 2 月 24 日から 28 日までの 5 日間、海外研修ワークショップをインドネシアにて行いました。アジア学院と ELCA が共に、持続可能な農業、所得創出、共同体開発の技術を分かち合うことで、支援するコミュニティのために役立つワークショップを目指しました。同時に、農村の人々の暮らしに関する洞察を与えることで、将来の学院の研修手法の発展に役立てたいと考えました。

今回のワークショップは、2003 年度卒業生のティゴー・シホンビングが自分のコミュニティと連携して企画をしました。ティゴーはジャワ島中心部の農村のココナッツ農家と共に働き、有機栽培の認定取得と市場の探索を支援しています。

ワークショップの内容は、有機ココナッツ栽培及び砂糖の加工、土着微生物（IMO）および天恵緑汁（FPJ）の活用法、ヤギ飼育、そして共同体構築を取り扱いました。各講座はアジア学院卒業生が講師を務め、共同体構築については 2014 年度卒業生のエウニケ・ワルダニー、土地主権については 2014 年度卒業生のルディ・チャスルディが担当しました。ルディはデジタルマーケティングの講座も担当し、アジア学院に関するディスカッションのリーダーも務めました。

2020 年度、2021 年度の下旬にも他の卒業生によるワークショップを予定していますが、新型コロナウィルス感染症の影響により詳細は未定です。

会計報告

皆さまのご支援に心より感謝申し上げます。

貸借対照表

2019 年度は資産が前年度末より約 4,940 万円減少し、約 9 億 3 千万円となりました。将来に備え、退職給与引当特定資産として 300 万円、施設設備維持引当特定資産として約 211 万円、毎年合計約 500 万円強の積立てを継続しています。更に女子寮改修（約 760 万円）、車両（中古）の購入、パソコン購入等の支出があり、教育活動の充実の為に施設や備品が整った分、現金預金が減少していると言えます。一方負債の部は約 2 億 600 万円で、長期借入金（346 万円）及び学校債（330 万円）の合計 676 万円を返済し、負債を減らすことができました。

事業活動収支

学生生徒等納付金　39,250,096 円（予算比 101%、前年比 137%）
2019 年度は海外団体学費指定寄付金が多く、前年比としては約 1,000 万円増でした。ここ数年、海外団体学費指定寄付金が安定して入っていることが、全体の財政の安定化に寄与していると言えます。

寄付金　58,157,121 円（予算比 85%、前年比 87%）
国内寄付のうち個人寄付は、クレジットカード決済が増えきており、1 万円以内の少額寄付者が増えています。団体寄付も小口化してきています。海外寄付に関してはほぼ予算を達成しました。予算外の収入として、二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金 90 万円の国庫補助金がありました。これは、半年に亘って行われた CO_2 削減ポテンシャル診断実施に対する補助金であり、99 万円の診断事業委託費としての支出がありました。つまりこの補助金により消費税分 9 万円のみで専門家による診断が実施でき、今後の再生可能エネルギー導入と拡大への土台を築くことができました。予算未達の主因は、もともとやや野心的に計上した特別寄付金（1,000 万円）に対して、実績が約 413 万円に留まった点にあると考えています。

補助活動収入　23,900,020 円（予算比 99%、前年比 84%）
昨年度苦戦していた豚肉の販売が再開し、豚肉及び鶏卵の畜産物販売の売り上げの総計は約 517 万円（予算比 138%、前年比 158%）となり、収入向上に貢献しました。他にも那須セミナーハウスの宿泊収入は今年度過去最高を記録しました。それに伴いコーディネート費・プログラム費収入なども順調でした。しかし、新型コロナウィルス感染症の影響で 3 月中に予定していた 3 団体のスタディキャンプが中止となり、約 50 万円の収入減がありました。

総括
2019 年度予算は、前年度過去最高の約 2,816 万円を記録した補助活動収入が、JICA の青年海外協力隊の委託研修事業の終了による約 350 万円の収入減や豚肉販売の 120 万円減等が予測され、収入不足分の 1,000 万円を特別寄付金として予算計上せざるを得ず不安要素の多いスタートでした。しかし、結果的には収支共にほぼ予算通りの結果となりました。3 月の新型コロナウィルス感染症の影響による減収もある中で、減価償却費及び基本金組み入れ前の収支は、329,994 円の支出超過で抑えられたのは幸いなことでした。新年度は、新型コロナウィルス感染症拡大の影響を受け、学生数の減少や国内向け教育プログラムやイベントの制限もあり、厳しい財政運営が予測されます。しかし、このような時だからこそ、アジア学院のミッションをもう一度再確認し、そのミッション実現に向けて、財政を安定すべく最善を尽くしていきたいと考えています。

佐久間 郁・ヴェロ
事務局長

監査報告

学校法人アジア学院寄付行為第 7 条の規定に基づき、2019 年度の事業および会計の状況について監査した結果、適性に執行されたものと認めます。

2020 年 5 月 9 日
学校法人アジア学院

監事：大久保知宏　　監事：村田榮

貸借対照表

資産の部	2018 年度末	2019 年度末
固定資産	**930,014,498**	**894,495,458**
有形固定資産	**828,245,780**	**791,145,229**
土地	216,420,666	216,420,666
建物	573,649,888	544,262,462
構築物	15,667,087	14,520,194
教育研究用機器備品	5,192,814	5,439,053
管理用機器備品	1,451,093	1,099,546
図書	6,380,612	6,380,612
車両	1,865,620	2,022,696
建設仮勘定	7,618,000	1,000,000
特定資産	**96,435,755**	**101,726,112**
第 3 号基本金引当特定資産	72,951,449	73,127,321
退職給引当特定資産	17,069,501	20,071,084
施設設備維持引当特定資産	6,414,805	8,527,707
その他の固定資産	**5,332,963**	**1,624,117**
電話加入権	161,600	161,600
出資金	154,000	154,000
預託金・保証金	76,670	91,530
奨学金特定預金	4,940,693	1,216,987
流動資産	**50,005,452**	**36,106,332**
現金預金	39,009,285	24,059,121
未収入金	699,191	695,200
貯蔵品	1,027,000	1,643,500
販売用品	4,148,814	3,302,209
前払金	5,014,373	5,473,340
仮払金	106,789	932,962
資産の部合計	**980,019,950**	**930,601,790**

負債の部		
固定負債	**125,945,665**	**91,725,665**
長期借入金 [1]	52,320,000	45,400,000
学校債 [2]	32,300,000	2,000,000
退職給与引当金	16,196,530	19,196,530
復興事業修繕引当金	25,129,135	25,129,135
流動負債	**88,139,985**	**114,904,719**
短期借入金 [1]	62,000,000	65,460,000
1 年以内償還予定学校債 [2]	4,210,000	31,210,000
未払金	1,979,512	1,089,593
未払金消費税	499,200	304,800
前受金	13,886,439	14,369,568
預り金	5,564,834	2,470,758
負債の部合計	**214,085,650**	**206,630,384**

純資産の部		
基本金		
第 1 号基本金	1,116,354,565	1,117,848,625
第 3 号基本金	72,951,449	73,127,321
第 4 号基本金	11,000,000	11,000,000
基本金の部合計	**1,200,306,014**	**1,201,975,946**
事業活動収支差額の部		
翌年度繰越収支差額	-434,371,714	-478,004,540
内今年度事業活動収支差額	-41,509,889	-43,632,826
純資産の部合計	**765,934,300**	**723,971,406**
負債及び純資産の部合計	**980,019,950**	**930,601,790**

事業活動収支の部

事業活動収入の部

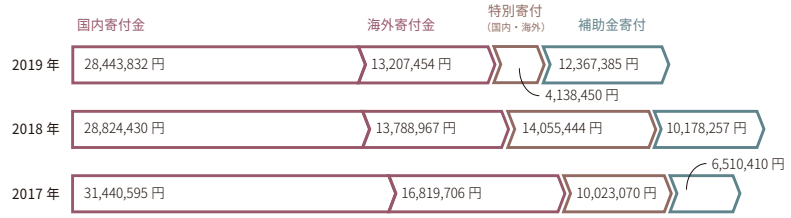
	2019 年予算	2019 年決算	2020 年予算
教育活動収入			
学生生徒等納付金 [1]	**38,930,947**	**39,250,096**	**34,294,029**
授業料	3,285,600	2,157,330	1,621,000
入学金	491,000	413,528	367,000
食事費	843,700	573,000	577,000
施設設備資金	843,700	573,000	577,000
渡航費	4,654,000	1,609,703	2,268,029
国内個人学費指定寄付金	0	50,000	0
国内団体学費指定寄付金	13,024,000	10,961,000	11,884,000
海外個人学費指定寄付金	4,400,000	2,579,800	2,600,000
海外団体学費指定寄付金	11,388,947	20,332,735	14,400,000
手数料収入	**32,000**	**24,600**	**32,000**
寄付金	**68,189,887**	**58,157,121**	**74,179,173**
国内国外一般寄付金	47,590,000	41,651,286	57,167,000
国内個人寄付金	11,740,000	11,117,804	11,800,000
国内団体寄付金	23,110,000	17,326,028	18,150,000
海外個人寄付金	4,390,000	5,578,500	5,000,000
海外団体寄付金	8,350,000	7,628,954	22,217,000
補助金寄付	9,642,600	12,367,385	13,722,820
特別寄付金 [2]	10,957,287	4,138,450	3,289,353
経常費等補助金	**0**	**900,000**	**250,000**
国庫補助金	0	900,000	250,000
付随事業収入 [3]	**24,043,000**	**23,900,020**	**25,510,000**
雑収入	**8,012,000**	**7,022,249**	**8,316,000**
施設設備利用料	4,742,000	4,640,230	5,016,000
出版物売却収入	270,000	143,900	300,000
その他雑収入	3,000,000	2,238,119	3,000,000
教育活動収入計	**139,207,834**	**129,254,086**	**142,581,202**
教育活動外収入			
受取利息・配当金	**50,000**	**35,295**	
その他の教育活動外収入	**0**	**0**	**0**
特別収入			
資産売却差額	**0**	**26,589**	**0**
事業活動収入合計	**139,257,834**	**129,315,970**	**142,581,202**

事業活動支出の部 [4]

教育活動支出			
人件費支出	80,449,224	76,483,224	84,510,504
教育研究費	31,466,235	26,036,363	31,129,817
管理経費	67,025,902	67,333,834	67,079,793
教育活動収入計	**178,941,361**	**169,853,421**	**182,720,114**
借入金等利息計			
借入金等利息支出	865,490	837,883	500,000
学校債利息支出	363,000	353,000	400,000
その他の教育活動外支出			
為替差損	0	234,560	0
事業活動支出合計	**180,169,851**	**171,278,864**	**182,720,114**
基本金組入合計	0	1,669,932	0
当年度収支差額	-40,912,017	-43,632,826	-40,138,912
前年度繰越収支差額	-434,371,714	-434,371,714	-478,004,540
翌年度繰越収支差額	-475,283,731	-478,004,540	-518,143,452

寄付金の種類別割合

合計 66,847,098 円



事業活動支出の内訳

人件費支出	**76,483,224**
教員人件費	19,546,773
職員 (含嘱託) 人件費	49,213,251
その他人件費	7,723,200
教育研究費	**26,036,363**
消耗品費	360,446
光熱水費	2,575,361
旅費交通費	882,624
奨学費	3,642,060
見学費	2,095,626
実験実習費	5,436,743
学生交通費	116,981
学生渡航費	3,940,839
教材費	289,250
研究費	691,821
宿舎費	318,521
学生厚生費	666,725
職員研修費	573,267
事務費	625,300
諸会費	52,100
卒業生同窓会支援費	220,000
プロジェクト費	1,210,358
特別講師費	764,363
車両費（バス・農業用車両）	1,557,994
雑費	15,984
貯蔵品振替差額	0
管理経費	**67,333,834**
消耗品費	342,320
光熱水費	1,032,700
旅費交通費	887,752
募金費	2,855,529
車両燃料費	352,000
福利費	119,413
通信運搬費	829,622
事務費	4,801,207
出版物費	719,297
車両修繕費	1,586,053
営繕費	1,138,206
損害保険料	930,180
賃借料	880,596
公租公課	833,650
諸会費	133,225
会議費	298,716
報酬委託手数料	2,889,638
補助活動収入原価	4,810,569
行事費	122,807
渉外費	31,620
雑費	105,834
減価償却費	41,632,900
教育活動外支出計	**1,425,443**
借入金利息支出	837,883
学校債利息支出	353,000
為替差損	234,560
事業活動支出の部合計	**171,278,864**

注釈

[1] 学生納付金には次のものが含まれる。
入学金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち入学金として指定されたもの
食事費：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち食事費として指定されたもの
施設設備資金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち寮費・施設設備資金として指定されたもの

[2] 特別寄付は、予算に計上されていない 30 万円以上の寄付（個人・団体）が含まれる。

[3] 農産物、加工食品、民芸品等の販売、プログラム等による収入。

[4] 2019 年度事業活動支出の内訳については、上記を参照。

カリキュラム 一覧

研修時間総計：2,018 時間
* 特別講師

指導者論

アジア学院の指導者論	荒川 朋子
サーバント・リーダーシップ	荒川 朋子、大柳 由紀子
アジア学院の歴史と建学の精神	荒川 朋子
参加型農村調査法	荒川 朋子、大柳 由紀子
自律学習	大柳 由紀子
時間管理法	ティモティ・アパウ
プレゼンテーション技術	大柳 由紀子
ファシリテーション技術	大柳 由紀子
ストレス管理法	ジョセフ・オザワ *
宗教と農村生活	ジョナサン・マッカーリー、ティモティ・アパウ
報告書作成指導	キャシー・フローディ
異文化間コミュニケーション戦略と紛争調停手法	セラジーン・ロシート *（NPO/NGO コンサルタント））
平和と紛争の変容におけるコミュニティ構築のための修復サークル	バン・ウンギ *（平和教育家）
平和構築	奥本 京子 *（大阪女学院大学教授）、石原 明子 *（熊本大学准教授）
尊厳	ジェフリー・メンセンディック *（桜美林大学准教授・チャプレン）

開発論

環境と開発	田坂 興亜 *（アジア学院理事）
栄養概論	ザチボル・ラコー・ドゾ
家計管理	ザチボル・ラコー・ドゾ
共助組合論	ギルバート・ホガング
ローカライゼーション	鎌田 陽司 *（NPO 法人「懐かしい未来」代表）
ジェンダー論	荒川 朋子
足尾銅山鉱毒事件と田中正造	坂原 辰男 *（NPO 田中正造大学）
気候変動のもたらす問題	永田 佳之 *（聖心女子大学教授）
那須疎水と西那須野開拓の歴史	大柳 由紀子
友の会の活動について	全国友の会、友の会各支部

持続可能な農業・技術

有機農業	荒川 治
野菜・作物概論	荒川 治
畜産概論	ギルバート・ホガング、大谷 崇、ティモティ・アパウ
作物病害虫管理	荒川 治
畜産病害虫管理	ギルバート・ホガング、大谷 崇、ティモティ・アパウ
代替技術	潘 炯旭
化学農業の危険性	田坂 興亜 *（アジア学院理事）
熱帯における自然農業	村上 真平 *（全国愛農会会長）
アグロフォレストリー	山田 祐彰 *（東京農工大学教授）
生産者と消費者の提携	大柳 由紀子
バイオガスワークショップ	桑原 衛 *（NPO ふうど代表）
立体農業の哲学	芳賀 欣一 *（戸沢村国際交流協会会長）
農業技術実習	荒川 治、櫻井 将伸
畜産技術実習	ギルバート・ホガング、大谷　崇、ティモティ・アパウ
肉加工実習	大谷 崇、小出 秀夫 *（ノイ・フランク那須）

卒業生セミナー

組織的持続可能性	ウェスリー・リンガ *（93 年卒業、99 年 TA・インドネシア Rural Development Action 代表）、ンガイ・メン *（2004 年卒業・ミャンマー CARD: Community Association for Rural Development 代表）

日本語、日本文化

小倉 恭子 *

有機農業実習

野菜作物：ぼかし肥作り、堆肥作り、土着菌の採取と活用、天恵緑汁、魚のアミノ酸資材、水溶性カルシウム、炭焼きと木酢作り、籾殻くん炭、自家採種、練り床を利用した苗作り、キノコ栽培

畜産：養豚（人工授精、出産、去勢）、養鶏（育雛、人工ふ化）、養魚、家畜衛生、飼料配合、発酵飼料作り、発酵床式畜舎

肉加工：ソーセージ、ハム

農場管理活動

グループによる農場管理（野菜作物栽培、および畜産管理）
フードライフワーク（自給自足のための農作業および給食準備）
グループリーダーシステム

その他の研修

コミュニティ・ワーク（田植え、稲刈りなど）、内的成長を促す活動（朝の集会、コンサルテーション、リフレクションペーパー、振り返りの日）、口頭発表、収穫感謝の日、国際交流プログラム、見学研修、農村地域研修旅行、西日本研修旅行、ホームステイプログラムなど

研修でお世話になった方々

（敬称略、順不同）

特別講師

田坂興亜、村上真平、鎌田陽司、山田祐彰、桑原衛、芳賀欣一、奥本京子、石原明子、バン・ウンギ、小倉恭子、坂原辰男、セラジーン・ロシート、ジョセフ・オザワ、永田佳之、小出秀夫、ジェフリー・メンセンディック、ウェスリー・リンガ、ンガイ・メン、全国友の会、友の会各支部、那須塩原警察署

農業関連見学・研修先

帰農志塾、金子美登・金子宗郎、田下隆一、桑原衛、民間稲作研究所

夏期個人研修

まんまる農園（丸山尚史）、自由学園那須農場、関根養魚場、エルム福祉会、チーズ工房那須の森、マ・メゾン光星、那須特別支援学校、那須友の会大田原もより

見学先・交流団体

栃木県 那須野ヶ原博物館、足尾銅山鉱毒事件学習（旧松木村跡、足尾製錬所）、渡瀬川遊水池、西那須野幼稚園、槻沢小学校、黒羽中学校、宇都宮北高校、宇都宮女子高校、国際医療福祉大学、西那須野教会、那須塩原教会、家の教会しおん、大田原カトリック教会、那須高原教会、矢板教会、塩谷一粒教会、四條町教会、宇都宮上町教会、鹿沼教会、松原教会、氏家教会、足利教会、足利東教会、小山教会、上三川教会、鹿沼キリスト教会、栃木教会、宇都宮教会
東京都 日本キリスト教団婦人会連合、東京ユニオンチャーチ、日本バプテスト同盟婦人会、中目黒教会
他府県 渡良瀬川鉱毒根絶太田既成同盟会、桐生東部教会、丸木美術館、ARISA (アジア学院サポーター）各位、各地ロータリークラブ

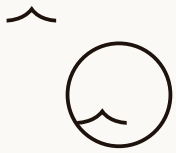
農村地域研修

山形県置賜地区 渡部務・美佐子、菅野芳秀、長井市レインボープラン推進協議会、基督教独立学園、黒沢巌、高畠共生塾（遠藤周次）、高畠町住民生活課エコタウン推進室、米沢郷牧場、ＪＡ山形おきたま農業組合、川西ときめきセミナー（佐藤恵子、原田加矢乃）、川西町役場（原田俊二町長）、しらたかノラの会、米沢興譲教会、草岡ハム加工組合、秋津ミチ子、東北おひさま発電株式会社（後藤博信）
山形県戸沢村 戸沢村役場産業振興課地域づくり推進係、産業振興課、国際交流協会、芳賀欣一、新庄最上有機農業者協会
山形県庄内地区 加藤鉱一、相馬一広、志藤正一、庄内協同ファーム、共立社鶴岡生協、ＪＡ庄内たがわ営農農政課、荘内教会（矢沢俊彦）、荘内教会保育園、藤島町農村環境改善センター、庄内産直センター、鶴岡市藤島庁舎エコタウン室、小野寺喜作、みます元氣村
秋田県仁賀保町 土田牧場、佐藤喜作、ＪＡにかほ、にかほ市役所、都市農村交流センター
岩手県 酒匂徹

西日本研修旅行

東京都 農村伝道神学校
静岡県 聖隷学園、聖隷クリストファー中・高等学校、遠州栄光教会、十字の園、アドナイ館、第二アドナイ館、山中忍
大阪府 大阪南 YMCA、NPO 釜ヶ崎支援機構、野宿者ネットワーク（生田武志）、関西沖縄文庫、在日コリアン・マイノリティー人権研究センター、関西いのちの電話、希望が丘教会
熊本県 熊本いのちと土を考える会、大澤菜穂子、からたち、水俣病資料館、ほっとハウス、坂本しのぶ（証言者）、石原明子
広島県 広島平和記念資料館
三重県 愛農学園高等学校
岐阜県 永谷嘉規・香、雑草塾

コミュニティメンバー 一覧



役員

理事長

星野 正興	日本基督教団愛川伝道所牧師

副理事長

遠藤 抱一	アジア学院首都圏事務所事務局長

理事

荒川 朋子	アジア農村指導者養成専門学校校長
後宮 敬爾	日本基督教団霊南坂教会牧師
門脇 英晴	（株）日本総合研究所特別顧問
小海 光	公益財団法人　ウェスレー財団代表理事
佐藤 範明	ホテルサンバレー広報
田坂 興亜（～2月）	元アジア学院理事長・アジア農村指導者養成専門学校校長
矢萩 栄司	日本聖公会下館聖公教会牧師
山根 正彦	元（学）香川栄養学園 常務理事

監事

大久保 知宏	藤井産業（株）執行役員 総務部長
村田 榮	那須ワイズメンズクラブ

評議員

荒川 治	アジア農村指導者養成専門学校副校長
荒川 朋子	アジア農村指導者養成専門学校校長
粟谷 しのぶ	弁護士、戸野・田並法律事務所
伊藤 幸史	カトリック糸魚川教会主任司祭
遠藤 抱一	アジア学院首都圏事務所事務局長
大柳 由紀子	アジア農村指導者養成専門学校副校長
門脇 英晴	（株）日本総合研究所特別顧問
菊地 功	カトリック東京大司教区大司教
小海 光	公益財団法人　ウェスレー財団代表理事
佐久間 郁・ヴェロ	アジア農村指導者養成専門学校事務局長
清水 たけし（～2月）	東京ユニオン教会長老
千 相鉉	在日大韓基督教会札幌教会主任牧師
長嶋 清	元アジア農村指導者養成専門学校職員
永田 佳之	聖心女子大学文学部教育学科教授
潘 炯旭	日本基督教団西那須野教会牧師
福本 光夫	（学）西那須野学園　西那須野幼稚園園長
星野 正興	日本基督教団愛川伝道所牧師
山口 和枝	元全国友の会代表
山根 正彦	元（学）香川栄養学園 常務理事
米田 ミチル	聖母訪問会総長
セラジーン・ロシート	NGO/NPO コンサルタント

職員

荒川 朋子	校長
荒川 治	副校長、教育部長、農場長（フードライフ課長）
大柳 由紀子	副校長、教務主任（教務課長）
佐久間 郁・ヴェロ	事務局長（総務課長）
コーディ・キーファ（～6月）	教務課 (学生募集)
メレディス・ホフマン（6月～8月）	教務課 (学生募集)
阿部・チャタジー・マノシ（9月～）	教務課 (学生募集)
スティーブン・カッティング	教務課 (卒業生アウトリーチ)
田仲 順子	教務課 (図書)
ティモティ・B・アパウ	チャプレン、教務課 (共同体生活)、フードライフ課 (畜産)
ジョナサン・マッカーリー	チャプレン、教務課 (共同体生活)
マッカーリー 里美	教務課 (共同体生活)
櫻井 将伸	フードライフ課 (野菜・作物)
大谷 崇	フードライフ課 (畜産)
ギルバート・ホガング	フードライフ課 (畜産)
ザチボル・ラコー・ドーゾ	フードライフ課 (給食)、国際関係課
ラビアル・R・J・エスメリオ	フードライフ課 (給食)
キャシー・フローディ	国際関係課長
山下 崇	募金･国内事業課長 (教育プログラム・那須セミナーハウス主事)
ルイパ・ヴェロ	募金･国内事業課 (那須セミナーハウス補佐・管理人)
中山 紀子（7月～9月）	募金･国内事業課 (教育プログラム・那須セミナーハウス補佐)
佐藤 裕美	募金･国内事業課 (販売・広報)
福島 昌代	募金･国内事業課 (食品加工)
八木沢 淳（～2月）	募金･国内事業課 (募金・広報・教育プログラム)
井澤 酪	総務課 (総務補佐)
君嶋 満恵	総務課 (会計)
安藤 香	総務課 (庶務)

業務委託

藤嶋 トーマス 逸生	ブランディング、ID システムデザイナー メディアデザイナー

ボランティア

通いボランティア

フードライフ課（農場）：サマンサ･センダ = クック、葛原 重徳、清水 益夫（兼営繕）、長谷 ゆみ、藤田 三夫、福田 幸太郎、安田 修平
フードライフ課（給食）：東 千尋、高村 京子、鈴木由美、木村裕子
募金・国内事業課（販売）：猪俣 美恵、柏谷 重明、杉田 万由子、長岐 幸雄、長岐 とし子、堀内 紀江、三宅 隆史
総務課：佐原 市郎
総務課（営繕）：平山 隆、伏見 卓

ベクレルセンター（放射能測定室）

阿久津 隆、高嶋 幸雄、西川 峰城、早坂 孝行、藤本 渉平（兼販売）

長期滞在ボランティア

教務課（学生募集）：リーケ・ウェーバ、ヤニス・シュナイダー、ユリウス・ハーツ
教務課（共同体生活）：ロベルト・ジュニア・コスタ
フードライフ課（農場）：木村 勇太、丹野 洸貴、ベンジャミン・スミス、ライザ・ヒンリッヒ（兼給食）
フードライフ課（給食）：デイビット・ケスラー、津布楽 夏月、玉崎 蕗
国際関係課：ケイトリン・オキン、スティーブン・ミラー、ジュディス・カール
募金・国内事業課（那須セミナーハウス）：中山 紀子、ワン・ユーロン（イヴォン）
総務課：メレディス・ホフマン（兼学生募集）

共に生きるために　2019年度　事業報告書　2020年6月26日発行　発行元：学校法人アジア学院　発行人：荒川朋子　編集人：佐久間 郁・ヴェロ、藤嶋 トーマス 逸生、八木沢 淳　印刷：プリントパック

2019 年度 卒業生

農村開発科

インド	(1) ジェレミヤ・ナルザリー（ボド・福音ルーテル教会）
インドネシア	(2) ジェフォン・レインハード・ベルヒトゥ （ユース・ウィズ・ア・ミッション）
	(3) スルヤ・ダルマ・バクティ・シトルス（インドネシア キリスト教会）
	(4) ハユ・プトゥリ・アスタリ（アル・アマナ学院）
ウガンダ	(5) ハディジャ・ンナシルタ（ソラック開発機構）
カメルーン	(6) アウレリー・ルーシー・ザンファック・ウベン（ビジョン・イン・アクション基金）
	(7) フォルバ・ヒルダ・ングウェ（カメルーン長老教会）
	(8) リタ・ンサカニ・ンゴ（カメルーン長老教会）
ガーナ	(9) アレックス・オウス（福音長老教会、アメゾテ・カレッジ）
	(10) イーブラヒム・フッセイニ（アブロノ有機農業プロジェクト）
	(11) フランシス・アルハッサン（北部地区平和構築基金）
	(12) ロードソン・セツォアフィア・クウァシ・タグボザ（持続可能な地域開発センター）
カンボジア	(13) サマン・チャン（共同体・健康・農業開発、カンボジア メソジスト教会）
ケニア	(14) デニス・ンゲンジャ・ジョセフ（参加型開発研究所）
シエラレオネ	(15) サー・ラミン（農業開発と変化のための青年会活動）
日本	(16) 眞木 凌
フィリピン	(17) コーネリオ・マスノン（ティッポ農場、ライフハウス村奉仕活動）
	(18) リチェル・デラ・バズ（アブラ教区 教員・労働者多目的組合）
ベトナム	(19) ヒエン・トゥ・レー（農村開発研究センター）
ミャンマー	(20) マナー・フレイ （カンペレッ市バプテスト連盟）
	(21) ラル・レム・ルアタ（北部ミャンマーメソジスト教会 レバチャン教区）
リベリア	(22) パトリック・クリエ（ヴォインジャマ自由ペンテコステ教会）

研究科

キリバス	(23) テベレタアケ・トカンテタアケ（国土環境省、農業開発省）
日本	(24) 小林 薫

共に農村の未来に投資しましょう！

アジア学院は草の根の農村コミュニティ指導者を養成しながら、共に生きるための学びを広げる学校です。その大切な活動を支えるのは私たちと皆さんです。一緒にの世界の農村の未来に投資しませんか？

郵便振替
振込口座　郵便振替　00340-8-8758
口座名義　学校法人　アジア学院

銀行振込
足利銀行　西那須野支店
口座番号　112403　（普通預金）
口座名義　学校法人　アジア学院
理事長　星野正興

その他のご寄付については：
>>>　www.ari-edu.org/support/

ARI 共に生きるために
address
〒 329-2703
栃木県 那須塩原市 槻沢 442-1
email info@ari-edu.org
tel 0287-36-3111
fax 0287-37-5833
website www.ari-edu.org
Facebook 学校法人 アジア学院
Instagram @asian_rural_institute
学校法人 アジア学院